

日本・西側諸国・中国..

日本の未来と世界における役割

— デイッチリー財団主催国際会議報告 —

ヨーロッパ地域委員会企画部長／日立製作所業務役員常務

清水 章
しみず あきら



英国・オックスフォード市を抜け森のなかを車で30分走ると、広大な敷地を持つデイッチリーパークがある。その中心に、18世紀建造のマナーハウスが、3世紀前の様式のまま訪れる者を待っている。

デイッチリー財団(The Ditchley Foundation)は、貿易・金融・文化・社会などさまざまなテーマで、各国の有識者を集め、4〜6週間に1度、チャタム・ハウスルール^(注)による会議を開催している。今回のテーマは「日本・西側諸国・中国」日本の未来と世界における役割」。11月21日〜23日に参加したので、その様子を報告したい。

3日間の参加者は、英国・米国・日本・中

国・カナダ・豪州・オーストリア・アイルランド・ロシアから、延べ37名。経済研究者が多いが、大学教授、英・日・中の大使館からも参加している。

初日は、Plenaryセッション。2日目は、参加者を3つのグループに分け、分科会方式で終日議論。テーマは分科会Aが「国としての日本の未来」、分科会Bが「日本の西側諸国特に米国との関係」、分科会Cが「日本の中国およびASEAN諸国との関係」。私は、分科会Cに参加した。最終日は各分科会の報告を踏まえた全体会議となった。

初日のPlenaryセッションでは、私は4人のスピーカーの1人を務めた。「日本の未来

を議論する前に、日本が今どのように自分の未来を描いているのか、まずは紹介したい」として、経団連資料を用い、Society 5.0を概説した。

このプレゼンは期待以上に聴衆に響いたようで、セッション後のブレイク時に何人もの参加者から、「印象的だった」「優れたコンセプトだ」「日本の未来の方向を理解した」といった、肯定的なコメントが寄せられた。

日本の役目を 真剣に探っていくと...

さて、私が参加した分科会Cでの議論展開を紹介したい。分科会は各1時間半の3回の

(注)チャタムハウス・ルール：会議の出席者は会議で得た情報や結論を引用、使用できるが、会議での発言者・所属機関など情報の出所を特定できるような引用はしてはならないというルール

セクションで行われた。第1セクションでは、自由で開かれたインド太平洋戦略(以下、FOIP)と、「一带一路」構想(以下、BRI)を並べた議論となった。

「FOIPはそもそも2007年に安倍首相が初めて使った言葉」「米国もFOIPというが、アクシオンには乏しい」「FOIPは中国の排除だと言う人もいるが、日本には全くその考えはない」と、まずはFOIPに関する認識が整理された。

次に、「2011年に中国のニューノーマル(新常态)のプログラムの一部として登場したBRIが、その後のTPPの急速な交渉進展で刺激され、TPPの対抗策とみなされる局面を迎えた。その後BRIへの批判に直面した中国は、BRIの基本理念が「共有」であって、決して「中国による所有」が目的ではないとした」と、BRIの経緯がレビューされた。

この議論のなかから、「日本と中国はアジアでもっと一緒に活動できる」という論調が生まれたが、「タイやパキスタンなど、自国内で日本と中国のバランスを取りたい、と考えているアジアの国は多い」とのアジア目線の軸も示された。

第2セクションは、「中国は教育(留学)・投資・技術開発・ビジネス構築の順で成長し、今後技術や事業でリーダーシップをとることもなるが、そのとき日本は中国を受け入れる準備ができるか」という問題提起から始まる。

った。

その先の議論はかなり逸脱したものとなり、「中国がRCEP(東アジア地域包括的経済連携)の次にTPPに加入する可能性」「米国の対中敵対姿勢の継続性」「国家安全保障上での、日本の米国依存の強固な継続」「米国のJCPOA(イラン核合意)離脱で被った産業界の損失」「今後欧州経済界も巻き込んだ議論の必要性」などが、挙げられた。

第3セクションは、「ASEANは次第に1つに固まり、相互理解が進みつつある」という意見から始まった。「ASEANとしてまとまると同時に、一国一国が独自の経済戦略を持ち始めている」「ASEANは、米・中・日・欧に対しニュートラルであり、ベクトルバランスをねらっている」と、分析されていた。これは最後に、「ASEANは世界のパワーバランスが現れる地域。日本はこの地域で経済的により良いパワーバランスを保つ行動をとるべき」と、まとめられた。

日本の未来の全体像とは

最終日、各分科会の報告が行われた。

グループAでは、「日本は今後高齢化問題を解決する国、ダイバーシティを実現する国」を筆頭に、生産性向上や人材開発、災害対策等についての可能性がまとめられていた。

続くグループBでは、「日米関係の基調は安全保障。これはさらにアジア・インド・欧州との連携に展開される。CPTPP(環太

平洋パートナーシップ)に関する包括的および先進的な協定)やG20で示した日本のリーダーシップを今後世界が必要とし、それは新しい民主主義のモデルになる、と期待される」と、まとめられていた。

わがグループCは、「日本はアジアの重心。米中両国との良好な関係も継続している。今後ASEANの地政学的バランスを保ちながら、その経済発展によりアクティブに貢献する方向」と、まとめた。

この会議の目的は、参加者の知的レベルの更新と、その後の社会活動への反映だと思われる。議論のなかには、「日本人は最重要課題は安全保障だとよく言うが、実は待ったなしの環境(災害)問題ではないのか」「経団連ペーパーのSociety 5.0は、ImaginationとCreativityが鍵だと述べている。つまり、Society 5.0を実現する人材の開発が、日本の急務なのではないか」という、非常に考えさせられる意見も多く出された。

それにしても、紅葉盛りの森をひっきりなしの小雨の向こうに見ながら、3日間議論して感じることは、「この米中摩擦や分断の時代で、日本のリーダーシップへの期待がだんだんと本格化してきた」ことである。日本の社会に、本当に世界を主導するだけの「底力」があるのか? いや、これは疑問形にしてはいけないのであって、決断と行動につながるにはいけない、と気持ちを新たにしたい。